

2023年4月1日

教職員のみなさん

理事長メッセージ

学校法人 南山学園
理事長 市瀬 英昭

「カトリック学園としての教育モットー『人間の尊厳のために』のもと行われる教育・研究の場で学ぶ学生、生徒、児童、園児がそれぞれの場で『ともに学ぶ喜び』を感じ、全教職員が本学園の教育理念を理解して、ここで『ともに働く喜び』を感じて、学園としてその教育事業の実りを日本社会と世界へ向けて発信する」

教育モットーの由来

1907年9月8日、3名の神言修道会（以下、「神言会」）会員が日本での宣教活動のために神言会総本部より派遣され横浜に上陸しました。1909年8月には、将来、南山学園を創設することになる同会会員のヨゼフ・ライネルス神父（1874年～1945年）が来日しています。日本におけるカトリック教育の重要性を痛感していたライネルス神父は「高潔、誠実、善良であれ」「一人ひとり、必ずひとつの尊い使命を与えられた、かけがえない存在である」との確信のもと、名古屋の地に、1932年に南山中学校を1936年には南山小学校を設立し、今日の南山学園の礎を築きました。

その後、多くの先達の努力と善意の方々の献身的な働きによって引き継がれてきた南山学園は、名古屋聖霊学園および聖園学院との二度の法人合併（1995年および2016年）、名古屋聖霊短期大学、南山大学短期大学部、南山国際高等学校・中学校の閉校（2004年度末、2019年度末、2022年度末）を経て、2023年4月1日現在、愛知県と神奈川県において、幼稚園から大学まで8つの単位校よりなるカトリック総合学園となりました。本学園はキリスト教世界観に基づく学校教育を目指しており、学園内の各単位校はそれぞれの歴史と校風を持ちながら学園全体の方向性について教育モットー「人間の尊厳のために」(Hominis Dignitati)を共有しています。この教育モットーは、南山学園創立者ライネルス神父の信念を引き継ぐ形で、第7代南山学園理事長アルベルト・ボルト神父（1908年～1990年）が発案したものです。しかし、それは個人的な理想ではなく、キリスト教世界観に深く根ざしたものとなっています。それはまた、一人ひとりが、例外なく、「神の似姿」に創造された侵すことのできない存在であるという聖書的人間観です。

新型コロナウイルス感染症拡大を経験している現在、また、世界に起きている様々な紛争や災害を目の当たりにする中で、「人間の尊厳のために」は本学園のみならず、広く社会と世界へ向けて発信されるべきメッセージになったと言っても過言ではありません。今後、様々な困難を経て、世界は積極的に「共に生きていく」ことについて考え、実践する方向へ

舵を切るのではないかと思われます。確かに、自然を含む「他者との共生」への道は険しいものですが、人類が生き延びるために、それも単に生き延びるだけでなく、幸せに生きていくためにそのような方向性が必要であると思われます。政治も経済も法律も医学も科学もそして「教育」もすべて「人間のため」にあるのであって、決して逆ではないということは言うまでもありませんが、問題はそれらが『『すべて』の人間』の『『本当』の幸せ』に向けられているかどうかということです。南山学園の教育活動、研究活動が目指す目標はそこにあります。各単位校には、この共通の教育モットーを堅持し、それぞれの具体的な場で実践していただくようお願いいたします。

教育理念の実践のために

2017年4月1日に理事長に就任した際には、本学園の基本方針と目指すべき方向性を再確認することを旨とし、ハンス ユーゲン・マルクス前理事長が2016年4月1日に掲げられた理事長基本方針を継承する形で理事長方針をお示ししました。理事長の再任に際し、また、2032年の学園創立100周年まで10年という節目にあたり、理事長メッセージとして、南山学園が掲げる教育理念（「宗教性の涵養」、「知的理解と厳しい知的訓練」、「地域社会への貢献」、「国際性の涵養」）について、私なりの理解をお示しし、教職員のみなさんと共有したいと思います。そのうえで、本学園の教育理念の具体的な実現に向けて、みなさんが考え、行動するうえでの道しるべとなるキーワードをお示ししたいと考えます。

「宗教性の涵養」

これは、カトリック学園としての教育・研究活動の基礎をなす部分です。宗教という場合、二つ次元を区別しそれを関連付けることが肝要となります。一つは、すべての人間に共通の普遍的な宗教性ともいうべき次元の宗教です。他は、ユダヤ教、イスラム教、キリスト教、仏教といった個別の具体的な宗教です。この意味における宗教は、具体的な「窓」と言えるでしょう。キリスト教という「一つの窓」から見ると世界は「どう見える」のか、そしてどう「ともに生きていける」のか、それらを学ぶ機会が本学園では提供されます。諸宗教は、それぞれの独自性と個性を生かしながら協力し、世界の平和のために貢献することが求められており、キリスト教もその貢献に参加しています。各単位校におけるアプローチは当然のことながら異なります。幼年期には、実際の体験が重要視されますが、世代が上がっていくにつれて知的、理論的な表現が必要となります。とりわけ大学においては高度で客観的な理解がなされることにより、異なる立場の他者とも知的なレベルの対話を可能とすることが求められています。これは、教育理念の次の側面へと進みます。

「知的理解と厳しい知的訓練」

この点についても各単位校での取り組みはそれぞれ異なっていますが、すべての知識

や学びは独善的な方法ではなく、他者との対話の内に獲得されるものであるとの理解が共有されています。自分と他者との事柄に誠実に関わっていく中で真理へと近づく姿勢が大切となります。学びにおいては「知的」な側面だけでなく、総合的なアプローチが必要となります。その意味で、従来の「主要科目」（主に5教科）とそれ以外の「周辺科目」といった区別は再考を迫られることとなります。すべての科目が大切であり、すべては繋がっています。重要ではない科目はありません。「認知能力」だけでなくコミュニケーション力、共感力、忍耐力などを指す「非認知能力」の大切さを想起したいと思います

「地域社会への貢献」

すべての知識と学びの実りを自分のためだけにとどめておくことはできず、周囲へ広がっていく、ということに関連しています。南山学園は地域社会に支えられ、地域社会とともに成長してきました。これまでにのべ22万人を超える卒業生を輩出し「人間の尊厳のために」を实践する社会作りに貢献してきました。地域社会とのつながりも各単位校においてそれぞれ異なりますが、各単位校で独自の実践を継続して下さるようお願いいたします。この貢献は地域社会への恩返しという意味も含んでいます。

「国際性の涵養」

南山学園の最初からの関心事でもあります。世界に存在する様々な国と文化に尊敬の念をもって接し、その出会いと対話による学びを大切にします。その際、自国の文化についての学びの重要性も再認識することになります。自らの文化と言語に関する理解なくしては、他文化・他言語との実りある対話は期待できないからです。人間だけでなく他の動植物が「ともに暮らす家」（教皇フランシスコ『ラウダート・シ』）である地球の上でさまざまなつながりの中で生かされているという事実に目覚め、すべて人が「他者」について責任を持っているとの自覚の上に行動を起こすとき、わたしたちは、真の意味の国際人となるのではないのでしょうか。

教育理念の实践には、学園に属する全構成員のみなさんとともに、直面する様々な課題に向き合い、行動しなければ実現はできません。健全な財政的基盤を確保するための「基準財務シミュレーションに示される目標額の達成」や、各単位校における目的および事業計画を具現化した基本的方策となる「中期計画」（2020年度～2024年度）の実現、自律的な学校運営のための「ガバナンス・コード」の遵守は、その大前提となります。それぞれ立場は異なりますが、みなさまそれぞれの立場から、どのような取り組みができるのか考え、行動していただくようお願いします。さらに、教育理念の实践を考えるうえでの道しるべとして、以下のキーワードをお示しします。新たな取り組みに着手する際、既存の取り組みの見直しをする際、何か困難に直面した際、このキーワードに焦点を当ててくださるようお願いいたします。

いたします。

- ① 各単位校が自校の歴史と校風を大切にしながら、一つの学園としてのアイデンティティを保つこと
- ② 各単位校間の連携、情報交換を促進すること
- ③ ミッションスクールの良さをアピールすること
- ④ 学園外の社会とりわけ同窓生との繋がりを大切にすること
- ⑤ 学園内の全教職員が本学園の歴史や理念を深く知る機会を持つこと
- ⑥ 学園の全構成員が誇りと喜びを共有できる学園を具体化すること

将来へ向かって

変化の激しい現代社会にあって世界と日本における「教育」が今後どのような展開を遂げていくのかについて正確に予測することはできません。しかし、どのような変化の中にあっても本学園の教育モットーは変わることがありません。この教育モットーの大きな方向性を共有しながら、教育理念の実践のために、各単位校は、それぞれの方法で具体的な課題に丁寧、誠実に取り組んでいただきたいと思います。人間の尊厳には、自然を含む「他者への責任」ということが含まれます。「人間は責任的存在である」と言われますが、この「責任を持つ」という在り方、あるいは、見返りを求めない「無償の愛」という行為は、時代がいかに変化しようとも、AIやロボットが取って代わることのできない、人間の尊厳に固有な長長であり続けるであろうと思われまゝ。人間の尊厳に生きることは抽象的な概念の中ではなく実際の生き方によって具体化されるはずのものです。人間の尊厳に生きる、それは、例えば、他者の中に、「宝」を見いだしそれを輝かせる、というような在り方である、とも言えます。教育の現場で必要とされているのは、向き合う相手に自身の尊厳を自覚させるような対話的な関わりではないでしょうか。これは教職員のみなさんの間にあっても同様です。教職員のみなさんには、本学園に属する学生、生徒、児童、園児が、自分たちの中にある宝、素晴らしさに気づきそれを伸ばしていく、誰かの、何かの役に立つことが喜びとなるような指導と関わりをお願いいたします。今後も、南山学園が、単なる現状肯定ではなく、あるべき社会の形成へ向けて貢献する人材を送り出していくことができるよう、学園に属する全ての構成員のみなさんのご協力を今一度、お願いする次第です。

以上